

不退転

第 97 号
東江中学校
校長 神元 勉

アンサンブルコンテスト

12月17日(土)、うるま市民芸術劇場において、第41

回沖縄県吹奏楽アンサンブルコンテストが開催され、
2年生の花城 枝音弥さん、玉城 楓くん、荻堂 柚希さんと、1年生の東野 美海さん、仲程 愛弥さん、長田 杏莉さん、上里 陽菜さん、新垣 みずほさんが出場しました。

管打楽器八重奏、8名中6名が1年未満の初心者でのチャレンジでした。技術的・意識的に未だ未だですが、確実な一歩を踏めたと感じました。(吹奏楽部顧問・津波古 健)



沖縄タイムス

論壇

2016年12月16日



仲村 晃

光に」という言葉に出合っ
けた。この子を光にすればいいのだと。先生たちと話すときはまず伊織を前に出す。そうしたら道は本人を選んでいった。伊織を前に出すと、みんなが彼を知ってくれた。伊織はこんなやつ、特別支援学級で、でも1組にずっといて「自由な人」と受け入れている。

長男伊織は中学2年生である。小中と地元の学校に通っている。伊織は生まれつき重度の障害があり今も発語はない。「この子をどうしたら?」「自分たちが死んだらこの子は?」と不安だった時期もあったが、糸賀一雄氏の「この子らを世の



と確信した。学校側も徐々に「ける」と変わっていった。面白いのが、伊織は「障害のない子」に慣れている。周りの子どもたちも自然に彼に言葉を掛ける。子どもは大人より数倍インクルーシブだ。

障がいあっても社会へ

長男の中学校生活から確信

と確信した。学校側も徐々に「ける」と変わっていった。面白いのが、伊織は「障害のない子」に慣れている。周りの子どもたちも自然に彼に言葉を掛ける。子どもは大人より数倍インクルーシブだ。

地域性もある。「ラッキーだ」と言われるが、それを「ラッキー」にしているとは思わない。障害がある子とない子は別、という行政、福祉、社会が目に見えない壁をつくっている。

赤い羽根共同募金
募金への参加パーフェクト達成!!
 全校生徒の皆さん、先生方、ご協力ありがとうございました。皆さんの優しさで、参加率100%を達成し、目標金額も越えることができました。『結』の力で、これからも支え合いのできる東江中にしていきましょう。
 by 生徒会

と確信した。学校側も徐々に「ける」と変わっていった。面白いのが、伊織は「障害のない子」に慣れている。周りの子どもたちも自然に彼に言葉を掛ける。子どもは大人より数倍インクルーシブだ。

障がいがあるからと周りがそれを奪ってはいけない。障害のある子、その家族に言いたいのは怖いけど、まず出てこらんよ、この社会にだって助けてくれる人はたくさんいる、心ない人もいるけど、社会や人生ってそういうもの。人生の醍醐味なくして幸せな人生なんてない。

